

氏 名 小野 光絵

学位(専攻分野) 博士(文学)

学位記番号 総研大甲第 2343 号

学位授与の日付 2022 年 9 月 28 日

学位授与の要件 文化科学研究科 日本文学研究専攻
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 日本近現代文学に於ける〈精神の両性具有〉表象研究

論文審査委員 主 査 多田 蔵人

日本文学研究専攻 准教授

山本 和明

日本文学研究専攻 教授

ダヴァン・テイ・エイ

日本文学研究専攻 准教授

谷川 恵一

総合研究大学院大学／国文学研究資料館

名誉教授

藤木 直実

日本女子大学 非常勤講師

(様式3)

博士論文の要旨

氏名 小野 光絵

論文題目 日本近現代文学に於ける〈精神の両性具有〉表象研究

本論文では、〈精神の両性具有〉表象という切り口から日本近現代文学のテキストを論じた。これは、ジェンダー（文化や社会通念上の性別、ないしは意識の上で自認する性別）における両性具有を意味するアンドロギュヌス（androgynous）の表象を論じるものであるが、中でも、内面の両性具有性の表象がみられるテキストを研究対象とする上で、便宜上「〈精神の両性具有〉表象」という表現を用いた。

具体的には、倉橋由美子（一九三五―二〇〇五）・尾崎翠（一八九六―一九七一）・中井英夫（一九二二―一九九三）・今村夏子（一九八〇～）の四人のテキストを採り上げ、語りによって表象される内面の両性具有性に焦点を当てた。

現時点において、近現代あるいは他の時代の日本文学における両性具有表象を概観できるまとまった先行研究はみられない。その上で、本論文であえて〈精神の両性具有〉表象に的を絞ったのは、男性／女性という性の二分法からこぼれ落ちる心の側面に光を当てることを企図してのことである。これを論じるにあたっては、主に、語り手や視点人物の内なる異性のイメージの表象に着目し、それを〈内なる異性像〉というキーワードで捉えた（語り手や視点人物の性に応じて適宜〈内なる男性像〉などとも言い換えるものとした）。

第一章では、日本近現代文学における両性具有表象を扱う先行・関連研究について、とりわけ内面の両性具有性への着目がなされているものを中心に概観した。従来の研究において、内面における両性具有性の表象に特化したテキスト、つまり語り手や視点人物が外見上は両性具有の体現者ではないものの、その内面の両性具有性に焦点が当たるテキストが見落とされている点を指摘した。また、ここで採り上げた加藤幹也のエッセイにおける、アンドロギュヌスを単独にして完全であるという理想の象徴として理解するという視点を、第二章以降でテキスト分析を行う上での重要な着眼点として継承した。

第二章では、とりわけ「アンドロギュヌス」というキーワードが直接登場するとともに、〈内なる異性像〉が極めて明確に表象される倉橋由美子の『結婚』（一九六五年）を、当時の時代状況を踏まえ分析した。女性作家Lの視点を通じて語られる、結婚相手のS、そしてL自身の〈内なる男性像〉としてのKとの関係に着目し、KはLが女性として生きる上でこぼれ落ちてしまう「もう一つの部分」に他ならず、倉橋テキストに登場する〈精神の両性具有〉を示すそうした女性作家たちは、当時のジェンダー規範（小説を書くことがほとんど男性特有の才能と見做された時代状況）を侵犯し突き破る存在であると結論づけた。

またこの章では、観念的・抽象的な作風であるとして批判的に言及されてきた側面のある倉橋のテキストの特徴について、むしろそれこそが〈精神の両性具有〉が表象される上で不可欠な抽象度であると指摘した。その上で、『結婚』で語られるLの〈内なる男性像〉は単に観念上の存在であることを超え、Lの感性や身体の状態とも強固に結びつき響き合う、いわば身体化された存在であることを論じた。

第三章では、KとLと名指される男女が共に登場する一九六〇年代の倉橋の小説十八本をテキスト横断的に分析することを試みた。KとLはテキストごとに舞台や細かな人物設定等が異なっており、双子であるほか、恋人や婚約者、生徒と家庭教師の関係、そして小説家Lと、彼女の思い描く〈内なる男性像〉としての架空の双子の兄Kなど、様々な関係性を取って登場する。少しずつ角度を変えて変奏されるこれら一連のテキストは、男と女という性の二分法を絶えず擦り抜け、あるいは組み替えていく試みであることを論じた。

特に双子としてのKとLの登場が（架空の双子であるものも含め）八本のテキストに渡って繰り返していることの意義については、次の点を指摘した。双子表象を通じて、男女のKとLが自他の関係として語られると同時に、一人の人間の内面の多重性としても語られている。テキスト間の設定のゆらぎを通じ、男と女という性の二分法のみならず、登場人物の自他の境界線をも揺さぶり、自己の内面の創造性の豊穡さという魅力と、自己と対をなす特別な他の存在というイメージの持つ魅力との間を行き来する試みでもあったと結論づけた。

第四章は倉橋に先行する女性作家尾崎翠の『木犀』（一九二九年）におけるチャップリン表象を探る論である。〈内なる男性像〉に通底する「チャアライ」の影のイメージを分析し、表現者としてことばを模索する「私」が、N氏という生身の男性（「私」に求婚し拒まれた人物）よりも、記憶の中の「N氏の影」に心惹かれている旨を明らかにした。また、「私」が映画「ゴールドラツシュ」の登場人物としての「チャアライ」と幻想上の会話を交わす場面について、ここに表象されるイメージは、映画のチャップリンのイメージを借用・変形することによって表現された「私」の分身であり、「私」の〈内なる男性像〉の具現化であると、後続の尾崎翠テキストとのテーマの連続性に言及しつつ結論づけた。

第五章は中井英夫の『光のアダム』（一九七六—一九七七年）を採り上げた。このテキストは先行研究において、天界に属する両性具有の天使をありありと語ることに徹するよりも、地上に取り残された「俗物」について語ることへと着地した結末への批判がなされていた。しかし、テキスト中に示された同時代資料を踏まえた上でのテキスト分析を通じ、示村という視点人物に、彼方へと去っていく不平等という青年との隠れた分身関係を見いだせることを指摘した。そして、『光のアダム』とは示村の中に潜在する〈精神の両性具有〉を暗示したテキストであると位置づけた。

第六章は今村夏子の『こちらあみ子』（二〇一〇年）を論じた。あみ子の恋が、「のり君」という生身の少年に向かっていようでありながら、「赤い部屋」（書道教室）を覗き見た際の、あみ子に「熱視線」を向けるのり君という幻想や、のり君の書く文字の魅力への強い関心へとずらされている点に着目した。そして、中学校卒業直前までのどこかの時点で、それが幻想であることにあみ子が気付きつつも、あえてその幻想を生きていた可能性をテキストに即して指摘した。そしてそれは、あみ子が苦難を受けながらも自身の創造性を発揮して生きることを模索する上でのイマジネーションの活用であったと結論づけた。

また、幻想としてののり君をあみ子の〈内なる男性像〉と位置づける上で、このテキストの中であみ子は〈女らしさ〉などのジェンダー規範の押しつけを受けていない点に着目した。そして、〈精神の両性具有〉というテーマを、男性／女性というジェンダーの二分法からこぼれ落ちていく心の側面の問題から、〈生身の人間として生きる上で自分自身の中からこぼれ落ちていく理想〉という一層普遍的な問題へと組み換える発想を提示した。

博士論文審査結果

Name in Full
氏名 小野 光絵

Title
論文題目 日本近現代文学に於ける〈精神の両性具有〉表象研究

本論文は〈精神の両性具有〉を鍵概念として日本近現代の小説作品を読みとき、それぞれのテキストに新たな解釈を加える試みである。〈精神の両性具有〉とは男でもあり同時に女でもあるような宙づりの存在を浮き彫りにする概念であり、本論文では倉橋由美子を中心に、尾崎翠から今村夏子に至るまで、およそ一世紀近い時を距てたテキストの系譜を取りだすことに成功している。

論文は全六章からなる。第一章「先行・関連研究」では、澁澤龍彦、高原英理、河合隼雄の先行研究を紹介し、両性具有について、理想の男女像や性をめぐる既存の社会通念を揺さぶる意義、あるいは近代的「自我」を相対化する役割が見いだされてきたことを述べる。その上で、外見からは推し量れない内面における性の越境という、先行研究が取り扱ってこなかったテーマを取りあげることを予告している。

第二章「倉橋由美子のテキストにおける双子・両性具有表象(1)——『結婚』を中心に」は、従来賛否双方の評価において前提となってきた倉橋由美子『結婚』の観念性を、登場人物・Lの分析によって乗り越えようとする論。筆者は女性であるLが精神的なつながりを強調するK(男性)はLの思い描く架空の人物であると指摘した上で、LにとってKとの関係は〈精神の両性具有〉であり、KとLの架空の結婚は社会生活において引き裂かれた男性性と女性性との交感であると論じる。さらにLの身体性に着目し、Lの性意識が観念的側面のみならず感性的側面においても描かれることを指摘した。本章では倉橋の模倣熱が創作の根幹をなすものであることや、田村隆一の詩との関連も論じるなど、堅実な調査に基づく注釈的な知見もちりばめられており、論の説得力を高めている。

第三章「倉橋由美子のテキストにおける双子・両性具有表象(2)——一九六〇年代における「K—L型の小説」の系譜」では、第二章の分析を踏まえ、「K」「L」が登場する倉橋作品を概観し、双子のモチーフが繰り返しあらわれ、未生以前の物語や蛇の表象などを通じて二人が社会的関係とは異なる次元で結びつけられ、男女の二分法を組みかえ、すり抜けてゆく小説作法を指摘している。近年、倉橋文学のいわゆるI型小説(Iという人物が登場する小説群)に注目が集まっているが、本章は第二章とあわせて、K=L型小説の作品史について解釈の見通しを示す論となっている。

第四章「尾崎翠のテキストにおけるチャップリン表象——『木犀』を中心に」では、小説に登場するチャップリンが、実際の俳優像とは異なる、語り手によって取りこまれ独自に変形された「チャアライ」のイメージ、〈内なる異性像〉であることを指摘した。本論文の特色は、この幻想のチャップリン像が語り手の言葉を引き出してゆく「媒介者」としての役割を持つとした点にある。『木犀』の文体は、想像上の異性として設置されたキャラクターとのあいだで書き手の言葉がゆらいでゆく様をこそ描いたものと見ることができ

けで、本章は尾崎翠文学の幻想性を文体論の面から再考する契機となるものである。

第五章「中井英夫『光のアダム』における隠れた分身表象」では、両性具有を扱ったフィクションとして有名ながら評価が高かったとはいえない『光のアダム』を、視点人物・示村の分析によって再評価する論。登場人物を幻惑してゆく森の中の廃屋は示村が作りだした幻想であり、「光のアダム」として登場する瀬良不比等は示村の象徴的分身であるという指摘がなされる。筆者によれば、示村は「男であるがゆえに「美」たりえない」という問題を秘めた存在であり、示村が後半で俗物めいた存在に墮してしまいうように見える展開は、ついに自覚することのない示村自身の「美」が逃れ去ってゆく過程であるという。『光のアダム』とは、性の越境など起こりえないという意識のただなかから潜在的な〈精神の両性具有〉が噴出する小説であるとされる。従来の幻想文学研究の枠組みのなかで失敗とされた構造にこそ本作の狙いがあるとする本章の主張は、同時代に三島由紀夫などが関与した美学と小説構造についての論議を相対化するものであり、〈精神の両性具有〉という枠組みが文学史に新しい視野を切りひらくものであることを示す論となっている。

第六章「今村夏子『こちらあみ子』」は、病などの負性として捉えられることの多い「あみ子」のキャラクターを、文字との関わりから評価しなおす論考である。まず、あみ子の母親が「習字」教室の教師でありあみ子が習字を教えられていた点に着目し、あみ子の母へのふるまいが文字をめぐる無意識の抵抗であると指摘する。さらにあみ子が熱烈に恋する「のり君」について「きれい」という語彙が頻出することに着目し、「のり君」のイメージは、あみ子が文字を媒介として幻想のなかに固定していった、現実を離れたイメージであることを指摘する。その上で筆者は、のり君の字から滴った墨汁を肯定的にとらえるあみ子の想像力に、社会的関係を突きやぶるあみ子の秘められた創造性を読む。「文字」というテーマに沿って作品を読み直すことによって「のり君」のイメージの内実を取りだした本章の指摘は、『こちらあみ子』を幻想小説として読み直すことにつながる。〈精神の両性具有〉のヴァリエーションである〈内なる異性〉という枠組みが、現代小説の読解に際しても有効な解釈格子であることを示した論である。

本論は、各作品の主たる人物が自らの内部に育んでゆく〈精神の両性具有〉ないし〈内なる異性〉の特質を大胆に読みとき、それぞれの作品の持つ幻想性を浮かびあがらせた試みとして評価できる。現在のジェンダー研究の「本流」とはやや異なり、あえて男／女の二分法を保存しつつそこからこぼれ落ちるものを細やかに辿り直してゆく本論文の方法は、読みやすく明快な論の運びと相まって、20世紀から現代にかけての長い時間にわたるテキスト群をあらたな形で捉え直してゆく視野を提供している。作品についての解釈をやや性急に跡づけようとする箇所があり、また両性具有表象の歴史性をはじめとする時代とのかかわりにはなお論じる余地があるものの、既存の理論的枠組みによりかかることなく独自の視点によって新しい解釈を提示し、テキストの系譜学を打ちたてた姿勢は評価に値する。

以上の点から、審査委員会は本論文が博士（文学）の学位に値するとの結論に至った。